



あんげろす第58号

著者	中島 耕二, 渡辺 祐子, 播本 秀史, 徐 正敏, 下田 好行
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニューズレター
巻	58
発行年	2012-05-25
URL	http://hdl.handle.net/10723/1827

あんげろす

12.5.30

研究と地の塩

中島耕二

「新栄だより」の2001年9月16日号に、次のような記事が載っている。

祝創立記念128周年 一緒にお祝いしましょう！

☆創立記念講演会 9月16日(日) 12:00-13:00

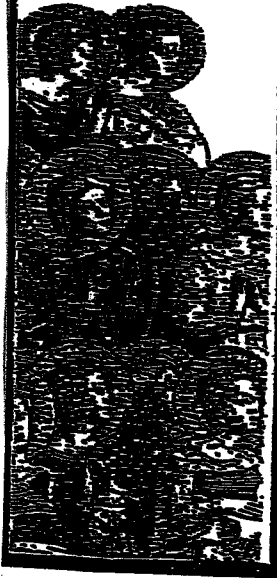
講演者 中島耕二氏 明治学院大学キリスト教研究所

「教会創立とタムソン宣教師」(於教会)

新栄(しんさかえ)教会は、1873(明治6)年9月20日、アメリカ長老教会宣教師デビット・タムソンによって建てられた東京で最古のプロテスタント教会である。しかし、創立者タムソンのことは誰も皆、忘れて久しかった。教会では講演翌週の9月24日、都営染井霊園で「タムソン先生墓前にて11時より創立記念墓前礼拝」を行い、そして、今年も9月には、祝創立記念139周年として第12回目のタムソン先生墓前礼拝が守られる。

第58号

2012年5月



所長就任のごあいさつ

渡辺祐子

2011 年度終了が迫った1月、いったんは播本前所長の続投が決まりかけていたものの、課程主任との兼任が難しいことから再選挙がおこなわれ、この4月から所長の大役を仰せつかることになりました。40名以上の組織の長になるのは、女子高時代の学級委員長以来です。

歴代の所長を務められた諸先生方とは比較にならない非力さに途方に暮れることもあります。幸い元所長の先生方はいつでも相談に乗ってくださいませし、大学教員としてはるかに先輩の(失礼!)主任の下田好行先生と、すっかりベテランの域に達しつつある教学補佐の納谷智子さんの強力な支えがありますので、周囲の方々のお力添えをいただきながら、所長の任を全うしたいと願っています。

昨年設立 45 周年を迎えた当研究所は、明治学院大学が掲げるキリスト教主義を実質的に担保する唯一の研究機関として、これまで多岐にわたる研究プロジェクトを中心に運営されてまいりました。その成果は毎年発行される紀要とオケイジョナル・ペーパーに示されているとおりです。これもひとえに客員研究員、協力研究員のご尽力があってこそと皆様にあらためて感謝申し上げます。こうした研究の蓄積を土台としつつ、プロジェクト研究を中心とする基本体制は今後も堅持してまいりますが、「キリ研が果たすべき使命とは何か」という問いに照らして、改善すべき点、新たにに取り組むべき課題には敏感でありたいとも思っております。

新たな課題として提示するほど確固としたものではありませんが、今ぼんやりと

考えているテーマが二つほどあります。ひとつは3・11後の私たちの生き方、この社会にありようについて――すでに遅きに失しているかもしれませんが――何らかの発信をすべきではないかということです。この思いは、昨年1月末に国際平和研究所が開催した国際シンポジウム「原発危機下の分断を越えて―私―とフクシマをつなぐ―」に出席した際、いっそう強められました。

シンポジウムの席上、参加された立教大学の先生が、脱原発宣言をしたドイツの倫理委員会の例を引きながら「原発事故で露呈された日本の近代化のゆがみ、戦後の社会の様々な問題を倫理的に問うシンポジウムが開けるのは、明学がキリスト教主義の大学だからだ」と仰ったのです。この発言に私は励まされもしましたが、それよりも明治学院がキリスト教主義を掲げていることそれ自体の責任の重さ、そして何より当研究所の使命の重大さを感じずにいられませんでした。それだけ注目されている、あるいは期待されているかもしれない、そのことを私たちは肝に銘じるべきではないかと思ったことでした。

ふたつ目は、宗教改革 500 周年を記念する世界的な記念事業に与ることです。来年 2013 年に創立 150 年を迎えようとしている本学ですが、150 という数字に注目するあまり、2000 年のキリスト教の歴史、なかでも 500 年が記念されようとしている宗教改革の伝統の中に本学を位置付けることを怠ってはならないでしょう。けれども、本学が三つの改革派教会、長老教会によって設立されたことはしばしば指摘されても、本学が掲げるキリスト教主義教育の理念が宗教改革の精神とどのようにかかわるのかという議論はあまりなされていないのが現状ではないでしょうか。2017

年を今から見据え、Reformation 500 に研究所として関わるができないだろうかと考えています。

以上、かなり大ぶろしきを広げた所信表明(?) となりました。橋本元所長がことあるごとに強調されていたように、本研究所の活動は客員、協力研究員のご支援なくして成り立ちえません。今後とも引き続きみなさまのご協力をお願いし、就任のご挨拶といたします。

わたなべ・ゆうこ (所長・教養教育センター教授)

所長の3年間で振り返って

播本秀史

2009年4月より、社会学部教授橋本 茂所長の後を受けてキリスト教研究所の所長に就任しました。就任早々の4月29日には、「賀川豊彦献身100年記念事業」の一環として、本学で記念講演会が行われることになり、実質的にキリスト教研究所が講演会の準備に奔走することになりました。橋本所長時代からの主任継続の手塚奈々子経済学部教授や4月に教学補佐になったばかりの納谷智子さんらと「てんやわんや」でした。講演会は3号館の大教室を埋め尽くす500人余の参加者を得ました。また、その年の秋学期9月26日からは大西晴樹学長(当時)の中期構想の一環として、校友会と共催の「ヘボン塾交友講座」も始まりしました。全9回の講座です。これの準備にも追われました。加えて11月には、各研究所が持ち回りで開催してい

る「明治学院大学港区民大学公開講座」の順番が、なんとキリスト教研究所に当たっていたのです。これを私が知ったのは夏休み明けの頃でした。急遽、全5回の企画を立て関係各位との連絡調整をしました。こんなわけで、就任1年目は「イベント」に振り回されたという印象が強いです。この1年間は橋本所長が任期1年を残して退職されたので、その補完としてのものでした。そのため、公開講座委員会の議長も1年間務めました。一般に所長の任期は2年間となっています。

2年目から改めて所長を務めさせていただくことになりました。主任は新しく教養センター准教授(当時)の渡辺祐子先生が引き受けてくださいました。教学補佐は納谷さんが継続です。2年目の最大の出来事は東日本大震災でした。何百年に一度あるかないかという未曾有の大災害でした。津波被害と原子力発電所問題が重く課せられています。キリ研でも原子力発電所問題について渡辺主任の発案で公開講演会を開催しました。

この3役が執行部となり、2年目、3年目と研究所の活動を所員、客員研究員、協力研究員の皆さんとともに、支えてまいりました。同時に皆さんに感謝いたします。

こんなわけで3年間所長として過ごしてまいりましたが、年々所員の先生が退職され、新しく所員になる先生がほとんどいない現状に危機感を抱いています。研究所自体の研究及び活動は数少ない所員の先生方の尽力と、客員研究員や協力研究員の活躍によって活発に行われています。かつて学長のクリスチャンコードがはずされた際、その代償として5・1条項が付与されましたが、有名無実化しています。この現状をしかるべき機関で検討していただきたく思います。

キリ研では2013年の明治学院創立150周年に向けてキリ研独自の記念出版を企画しています。プロジェクト長の司馬純詩所員（国際学部教授・宗教部長）を中心に案が進行中です。新所長の渡辺先生と新主任の下田好行先生（心理学部教授）の下、新企画も進行中です。またこの執行部に納谷さんが新しい制度のもとでの派遣として残られたのはキリ研にとって幸いでした。

どうぞ皆さま、キリ研の働きを覚えてくださり、キリ研を今後ともよろしく願っています。

はりもと・ひでし（所員・文学部教授）

日韓関係からアジアへ
一日韓キリスト教史研究の未来への課題

徐正敏

2012年4月より明治学院大学の客員教授として赴任し、私の研究と教育の現場が日本へと移ることになった。この過程において何よりも切実に神様の“見えない御手”を感じ、これに感謝したい。そして私の活動のベースが伝統ある名門校、明治学院大学に備えられるにあたり、ご助力いただいた大学の様々な先輩、同僚の方々に深い感謝の思いを伝えたい。過ぎる12年間、韓国の延世大学校で日韓キリスト教関係を研究しながら、多くの弟子たちを教養育てることができたのも神様の恵みであり、また多くの先輩、弟子たちの深い愛と配慮に依るものと告白したい。早くから日韓関係、特に両国のキリスト教関係の歴史のた

だ中で命を懸けて先駆者として新しい道を切り開いた多くの諸先生方、特に 吳允台、韓哲犧、李仁夏、土肥昭夫、澤正彦、藏田雅彦の歩まれた道を想起するとともに、また感謝したい。

私はその間、日韓キリスト教関係史研究を1945年以前に限定し主に研究をしてきた。これは特に日本帝国主義の韓国植民地政策、そしてその支配下にあった韓国社会と韓国キリスト教の状況が持つ特殊な歴史関係が重要な意味を持っており、それを通して日韓関係史の一つの分野を理解することができるためである。特にこの時代の韓国キリスト教は欧米の宣教師たちの福音の伝授に従い、それを忠実に行おうと努力したが、このこと自体が日本の韓国支配に対する抵抗でもあった。これとは反対に日本キリスト教はできるだけ欧米キリスト教に抵抗しながら、“国粹的キリスト教”を指向する、土着的日本神学を構築しようとする教会史的特性を持っている。

しかし、これからの新しい日韓キリスト教関係史研究は新しい時代、すなわち戦後に注目して展開されなくてはならない。この時代の日韓キリスト教関係史の重要なテーマは韓国キリスト教の新たな抵抗、すなわち軍事独裁政権下における民主化闘争、そして日本キリスト教の戦争責任告白と社会に対する預言者的活動である。特に日本キリスト教については、1967年に日本キリスト教団が戦争責任告白を発表した後のマイノリティによる宣教活動を、重要な社会参与としてとらえ、これをひとつの研究テーマとして注目しなくてはならない。「在日」、沖縄、「部落」、アイヌなどに対するキリスト教の関心をその例として挙げるができる。この過程で日本キ

リスト教は韓国キリスト教の民主化運動と民族統一運動のパートナーとして協力し、戦前の葛藤関係の日韓キリスト教関係史にから相互協力と連帯の可能性を創出するに至った。しかしこの時期、このような友好と連帯関係を形成した両国のキリスト教は、ある意味で少数派の歩みとして見なくてはならないという限界を有している。

今の時代において意味深い社会参与と預言的活動に参加した日韓キリスト教、特に韓国キリスト教の社会参与は、少数のリベラル派の一部によってなされたに過ぎない。多数のいわゆる福音主義派は教会の量的成長と極端な資本主義化、政教癒着に加担してきた。彼らは欧米的キリスト教を再生産することに没頭し、このような過程で蓄積された力量を背景に、世界宣教、特にアジア宣教へと歩みを進め、旧時代の欧米キリスト教の帝国主義的宣教を凌駕する物量的宣教に重点を置いた。この流れは、アジア、アフリカなどの被宣教地域で韓国キリスト教が欧米キリスト教の代理人であると認識する状況を生み出すに至った。もちろんその過程は、一部強圧的であったり多額の宣教資金を投入する物量的宣教に対する反発も随伴している。このような状況において適切な神学的批判と預言者の省察を欠く韓国の神学は、総体的にその関心を欧米、特にアメリカの神学に傾注し、韓国教会が欧米キリスト教の一部になることを警戒できず、逆に自らその先導者となった。

一方、戦後の日本キリスト教は、量的側面においては韓国キリスト教多数派と比較できないが、欧米化の方向へと舵をきった点では同様のことがいえる。特に日本の

神学はその内容的な批判は別とし、戦前にあった「日本神学」、「日本キリスト教」の独特な福音の土着化には一定の貢献を持つものではあるものの、むしろ欧米神学に没頭することを通して、戦前のキリスト教が国粹主義に陥った過誤を克服する代価として、神学的な偏向を生み出した。

戦後の日韓キリスト教関係史を眺めると、そこには少数の協力の絆による和解が存在したものの、両者の大多数はそれぞれ欧米神学一辺倒であった。その量と密度においては韓国教会がより大きかったことは勿論である。これに対して、新たな日韓キリスト教は、両者が福音の土着化という観点から、アジアに注目することを課題としなくてはならないと思う。失われたコンテキストに対する再解釈という新たな領域を、日韓関係史の主題として設定しなくてはならない。

福音は「宣教のテキスト」と「受容のコンテキスト」が結合し拡散し、具現化してゆく。このことを前提として、これからの新しい日韓関係史は日韓関係という限定された範囲を超え、アジアのコンテキストへと拡大し、理解されなければならないはずだ。日本と韓国はまさにアジアの文化と伝統の中心であるからである。これは「アジア的韓国神学」、「アジア的日本神学」を再創出し、そしてそのような省察を通して新しい日韓キリスト教関係史を構築することを意味する。このような方向に同意する仲間と共に研究の力量を蓄積していくことが望まれる。

ソ・ジョンミン（協力研究員・教養教育センター客員教授）

下田好行

今年度主任を仰せつかりました下田好行と申します。明治学院大学に3年目です。まだ、右も左もよくわかりませんが、渡辺祐子所長や納谷智子さんに教わりながら仕事を覚えていきたいと思っています。

播本秀史所員には、昨年度まで所長をお引き受けくださり、研究所をここまで引っ張ってきていただきまして感謝にたえません。所員でいたときはたいして感じていませんでしたが、執行部になるといろいろと大変だということがよくわかりました。

徐正敏氏客員研究員は、これからの日本と韓国のキリスト教研究は、従来の日韓関係を越え、アジアのキリスト教神学として再構築してゆくことをご提案なされた。世界が変動している今、よりホリスティックな視点でものを見、感じたい。どうか日韓のキリスト教研究に新しい時代の息吹と活力がうまれますように。

渡辺祐子所長の所信表明には「キリスト教主義の教育と何か」という根本的な問題に触れています。これは今、明治学院大学が問われている課題でもあると思います。この明治学院大学が他大学とは違うどのような香りを放つことができるか。まずは私たちの霊性が強められたい。目に見えないものの力を信じたい。

しもだ・よしゆき (主任・心理学部教授)

研究所活動 (4月-7月)

所員会議

第1回

開催日時: 4月25日(水) 14:00-

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

第2回

開催日時: 5月23日(水) 14:00-

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

第3回

開催日時: 6月27日(水) 14:00-

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

第4回

開催日時: 7月28日(土) 11:00-

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

1日研究会 (予定)

開催日時: 7月28日(土) 11:00-

開催場所: 白金校舎本館 92 会議室

発表①

発表者: 今村正夫客員研究員

コメンテーター: 植木献所員 (予定)

発表②

発表者: 高井ヘラー由紀客員研究員

コメンテーター: 渡辺祐子所長 (予定)

発表③

発表者: 佐藤飛文協力研究員

コメンテーター: 徐正敏協力研究員

懇親会 (予定)

開催日時: 2012年7月28日(土) 17:45-

開催場所: 白金校舎本館 10階大会議場

SCA 史歴史編纂 P J

研究会

第1回

開催日時: 2012年4月12日(木) 13:00

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

第2回

開催日時：2012年5月10日（木）13：00

開催場所：白金校舎キリスト教研究所
第3回

開催日時：2012年6月14日（木）13：00

開催場所：白金校舎キリスト教研究所
定例会

開催日時：2012年5月26日（土）13：00

開催場所：白金校舎キリスト教研究所

150周年記念出版PJ

公開研究会

第1回

開催日時：2012年4月25日（水）16：00-

開催場所：白金校舎キリスト教研究所

発表題：「賀川豊彦と公共の神学～Do for Others」

講師：加山久夫（賀川豊彦記念松沢資料館館長、本学名誉教授、本研究所名誉所員）

第2回

開催日時：2012年5月23日（水）16：00-

開催場所：白金校舎キリスト教研究所

発表題：「キリスト者とマルクス経済学」

発表者：中山弘正（本学名誉教授、元明治学院学院長、本研究所名誉所員）

宣教師研究PJ

公開研究会

第1回（予定）

開催日時：2012年6月16日（土）13：30-1

開催場所：白金校舎本館 92 会議室

「東アジアキリスト教史研究の現状について」

発表①「韓国キリスト教史研究所の回顧・現状・展望」

発表者：徐正敏（本学教養教育センター客員教授、本研究所協力研究員）

コメンテーター：松谷基和（早稲田大学留学センター講師）

発表②「中国キリスト教史研究所の回顧・

現状・展望」

発表者：渡辺祐子（本学教養教育センター教授、本研究所所長）

コメンテーター：徐亦猛（神戸基督教改革宗長老会牧師、関西学院大学神学部講師、本研究所協力研究員）

公開講演会（予定）

「語り継ぐ平和への想い～ある作家の体験から」

講師：早乙女勝元（作家、児童文学作家、東京大空襲・戦災資料センター館長）

開催日時：2012年7月13日（金）16：25-

開催場所：白金校舎2号館 2401 教室

アウシュヴィッツのコルベ神父・原画展（予定）「絶望からの希望」

開催期間：2012年7月10日（火）-7月20日（金）

開催場所：白金校舎キリスト教研究所

新着図書（4月-6月）

- ・『福音と世界』No. 4、新教出版社、2012。
- ・『福音と世界』No. 5、新教出版社、2012。
- ・『福音と世界』No. 6、新教出版社、2012。
- ・『公共福祉とキリスト教』（稲垣久和著）、教文館、2012。



2012年度キリスト教研究所構成メンバー

所長 渡辺祐子
主任 下田好行

所員

教養教育センター：植木 猷、佐藤 寧、嶋田彩司、永野茂洋、渡辺祐子
文 学 部：久山道彦、斉藤栄一、播本秀史、水落健治
経 済 学 部：鶴殿博喜、手塚奈々子
社 会 学 部：遠藤興一、深谷美枝、宮田加久子
法 学 部：鍛冶智也、辻 泰一郎
国 際 学 部：司馬純詩
心 理 学 部：下田好行

(以上 18 名)

名誉所員

大西晴樹、小田島太郎、加山久夫、久世 了、柴田 有、千葉茂美、中山弘正、
成瀬武史、新倉俊一、橋本茂、花田宇秋、真崎隆治、丸山直起、森井眞、山崎美貴子、
吉田 泰

(以上 16 名)

客員研究員

今村正夫、高井ヘラー由紀

(以上 2 名)

協力研究員

石本東生、稲垣久和、岩崎次郎、岩田ななつ、岡部一興、加藤 実、北川一明、木村一、
清澤達夫、小暮修也、小林孝吉、齋藤元子、佐藤飛文、島田由紀、清水有子、周東華、
徐亦猛、鈴木進、瀬川和雄、徐正敏、田中浩司、辻 直人、手代木俊一、中島耕二、
原 豊、東 義也、丸山義王、宮坂弥代生、村上文昭、吉馴明子、渡辺英男、
Andrew H. Ion、Pino Marras

(以上 33 名)

派遣社員

納谷智子

(以上 1 名)

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第58号

2012年5月25日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214

Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩